

英語学習のための AI ツール使用に関するアンケート調査 —英語リテラシー教育プログラムの実施に向けて—

川西 慧, 田中 真由美, Kevin Bartlett, 佐々木 顕彦

本稿の著者らが所属する専攻では、英語学習に AI(artificial intelligence)を利用するリテラシー教育プログラムの枠組みを検討し、その実施に先んじて学生の AI ツール使用について調査した。その結果、すでに多くの学生が AI に触れ、利用していることが明らかとなり、その多くが AI を肯定的に感じていることがわかった。また、AI を利用した学習については、AI に従来の教師のようなフィードバック機能を求めていることや、全体ではなく部分的な使用など、限定的な使用が適切だと思っていることなども明らかになった。

キーワード : AI, 英語教育, ChatGPT, リテラシー, 機械翻訳

1 はじめに

2022 年 11 月, Open AI によって ChatGPT が発表された。Generative Pretrained Transformer という名の通り, 膨大な言語データによって予めトレーニングされた AI が人間のような言語を生成することができるもので, 生成 AI や chatbot と呼ばれている。生成 AI に始まり機械翻訳やその他の AI ツールなどの目覚ましい技術の進化が日々起こる一方で, 教育現場においては, 一部の生成 AI が事実と異なる内容を産出し, 「嘘をつく」ことの影響にどう対処するかや, AI が生成した文章や翻訳した文章を課題などに利用することを剽窃や不正とみなすかなど¹, 授業や課題における AI 使用に関するポリシーに関しても合意に至っていない。また, 発達段階にある学習者の文章作成技能の習得や, 思考力や表現力の形成にまつわる影響についても長期の研究に基づくエビデンスはなく, 未知の部分が多いまま急速に AI ツールの使用が広まっている状態である。メディアでは, どの仕事や技能が AI に取って代わられるかなど²がセンセーショナルに報道されるため, こうしたツールの出現や言説のあり方が学習者の学び方や動機づけに影響する可能性もある。

こうした背景で, 2022 年末から 2023 年においては, 世界のさまざまな教育機関や教育委員会において, 生成 AI を全面的に禁止する宣言や, 条件付き使用を認めるなどその対応はさまざまであった。日本国内でも文部科学省から ChatGPT に関する文書が複数回発表されており, 中でも「大学・高専における生成 AI の教学面の取り扱いについて(周知)」において, 対応を検討

するよう各機関に促している³。本稿の著者らが所属する大学においても, 2023 年 5 月に, 生成 AI を活用しながらも自ら考え, 行動するよう声明が出された。

このような目覚ましい発展を遂げる AI との共存やその活用を意識しつつもまた, VUCA (Volatility 変動性, Uncertainty 不確実性, Complexity 複雑性, Ambiguity 曖昧性)時代とされている現代を乗り越えていく学生を育成するため, 外国語教育や異文化理解においても複眼的思考や問題解決能力, 探究力を養うことを取り入れることは喫緊の課題である。これらを踏まえ, 本学英語グローバル学科英語文化専攻においては, 本稿著者の田中らを中心に, 自己, 他者, AI との批判的な視点による対話を通して, 英語リテラシーを育成するプログラムを検討することとした。

2 背景

生成 AI は非常に新しいものではあるが, それと類似するツールである機械翻訳については, 性能の高まりと共に, 外国語教育に携わる者の間ではさまざまな問題が挙げられてきた。英語グローバル学科においても, 英作文課題を全部機械翻訳することを禁止し, それをシラバスに明記するとともに, 本学の英文添削サポートデスク「Writing Plaza」にて機械や AI でなく人間によるフィードバックを利用するよう推奨してきた。

しかしながら, 機械翻訳に頼って課題作文を作成する者や, フィードバックを受けるための Writing Plaza にさえ, 機械翻訳した作文を持参する例が後をたたなかった。機械翻訳があまりにも一般的になりつつある

Kei KAWANISHI 英語グローバル学科准教授
Mayumi TANAKA 英語グローバル学科准教授
Kevin BARTLETT 英語グローバル学科准教授
Akihiko SASAKI 英語グローバル学科教授

A Survey of University Students on Their Use of AI Tools for Learning English: Towards Implementing an English Literacy Education Program

中、単純に禁止を言い渡しても利用を止めることができないことが明らかであった。

その中で登場したのが生成 AI である。本稿著者の田中を中心に、学科の英語文化専攻では、AI ツール使用に関する問題点を共有するとともに、AI ツールの使用方法に関する指導や支援の必要性を話し合い、それに伴い、学生の AI ツール使用の実態を把握する必要性についても共通の見解を持った（2023 年 2～3 月）。

3 先行研究と研究の目的

本研究の目的は、学生の AI ツールの使用実態を把握し、英語文化専攻のカリキュラムでの指導・支援のあり方を検討することである。

生成 AI については 2022 年末に発表されたばかりであり、それから 1 年に満たない本稿の執筆時点において、長期に渡る観察や詳細な研究デザインに基づいた調査はいまだ出揃っていないのが現状である。しかしながら、機械翻訳を行うことのできる Google Translate や DeepL といったツールについては近年精度が上がったことから使用も増え、研究もなされてきた。まずはこうした研究をレビューしたところ、機械翻訳をタブー視し、禁ずる方針から、共存や活用に舵を切る機関が多くなってきていることがわかった。そういった環境で行われた研究によると、Google 翻訳を利用した作文の生成においては、学習者からの肯定的意見が聞かれるだけでなく、機械翻訳の過程を経て自身で書き直す過程において作文の質が向上したことも報告されている⁴。また、グループでの協働学習に機械翻訳を取り入れた例では、機械翻訳を経てグループで書き直す過程において、学習者間の対話や教師からの指導が学習者のメタ言語意識を高める要因となった他、自信や意欲、自律性が高まったという報告⁵もある。

こうしたことから、AI ツールが生成・出力したものを成果物とするのではなく、AI を人間によるフィードバックのような位置づけで学習の過程を支援する媒体として取り入れることが重要と考えられる。またその過程に AI だけでなく、学習者同士の対話に加わることが最終パフォーマンスや外国語学習の態度に肯定的な影響を与えるであろう。

これらを踏まえ、英語文化専攻では、自己、他者、AI との批判的な視点による対話を通して、英語リテラシーを育成するプログラムの枠組みを検討することとした。「リテラシー」の原義は「読み書き能力」であるが、文字と音声の変換ができるということに留まらず、文章全体を読んで内容を理解する能力や、基礎的な知識やスキルといった意味で使用される概念である⁶。本稿における「英語リテラシー」は、英語で書かれた文章の

理解と英語による文章執筆の能力のことであり、主に英語のリーディング、ライティング、卒業研究の指導で育成することを想定した能力である。

また「批判的」とは、否定的に捉えるとか、何かを非難をするという意味ではなく、批判的思考（critical thinking）における批判を意味する。『現代心理学辞典』によると、批判的思考とは、「証拠に基づく合理的（理性的・論理的）で偏りのない思考」⁷のことであり、相手を批判することとは限らず、「自分の推論過程を意識的に吟味する省察的思考」⁷を意味する。つまり、意識的に熟考することにより、AI の産出することの妥当性、正確さや適切さを自身の思考を通して吟味する姿勢を持つことを意味する。

このプログラムは大学 4 年間を通して縦断的に、そして各学年で科目横断的に行うものである。科目や学年ごとに指導の在り方に多少の変化が生じる予定であるが、共通する指導の流れは以下の 4 つのステップである。

- Step 1 英語について自分で考える
- Step 2 自分の考えが正しいか、他者や AI と英語や日本語で話し合う
- Step 3 自分や他者の考え、AI の回答を批判的に検討する
- Step 4 自分の考えを再構築して英語で表現する

プログラムは、令和 6 年度に入学する英語文化専攻の 1 年次科目から開始する。実施に際して、指導で使用する AI ツールや、指導上の留意点については事前の検討が必要となる。そこで本研究では、学生の英語学習における AI ツール使用に関する実態を把握するために調査を実施した。

4 調査方法

学生らが英語学習においてどの程度、またどのように AI ツールを使用しているのか、その実態を把握するために下記の方法で調査を行った。

調査の対象は当該専攻で英語を学んでいる 3・4 年生とし、2023 年 5 月 17 日～6 月 2 日までの調査とした（5 月 11 日にパイロット調査も行った）。質問紙調査を Google フォームによる無記名式で行い、調査項目は下記の通りとした。

項目：

1. 所属学年
2. 大学入学以降の英語学習のための AI ツール使用の有無（選択回答）
3. 使用したことのある AI ツール（複数回答）

- 大学の授業で利用を勧められたり、許可されたりしたことがある AI ツール（複数回答）
- これまでに使用したことがある AI ツールの英語学習での活用方法（自由記述）
- AI ツールを英語学習で使用したときの気持ちや感想（自由記述）
- AI ツールを英語学習のために役立てる方法について（自由記述）

学生の回答は、項目1~4については単純集計、項目5~7については内容分析⁸を行った。内容分析の際は2名の分析担当者的一致率が100%になるまで計3回分析を繰り返した。

5 結果と考察

回答者は3年生37人、4年生65人の計102人であり、本学に入学してから英語学習のためにAIツールを使用したことがあるかという問いに対し、回答者の96%である98人が「ある」と答えた（項目2）。また、入学後英語学習のために使用したことがあるAIツールについて確認した項目3では、図1のような回答が得られた。

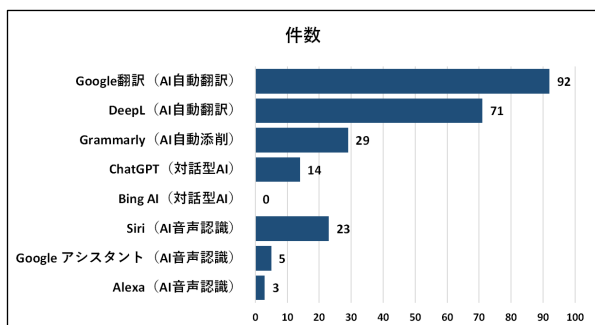


図1：英語学習のために使用したことがあるツール

これを見ると、Google翻訳やDeepLといったAI自動翻訳、自動添削であるGrammarlyの使用者が多いようである。話題のChatGPTについては14件のみが英語学習のために使用したことがあるとのことだった。また、スマートフォンなどに付随するAI音声認識としては、AppleのSiriを使用したことがある学生が23人おり、AmazonのAlexa（3人）やGoogleアシスタント（5人）と合わせると31人であった。

次に、項目4では、大学の授業において勧められたり、許可されたりしたツールについて調査した（図2）。

授業にて勧められたり許可されたりしたことがない学生は34人いたが、それ以外の学生からはGoogle翻訳、DeepLといった翻訳ツールの他、添削のためのGrammarlyや生成AIであるChatGPTが挙げられた。

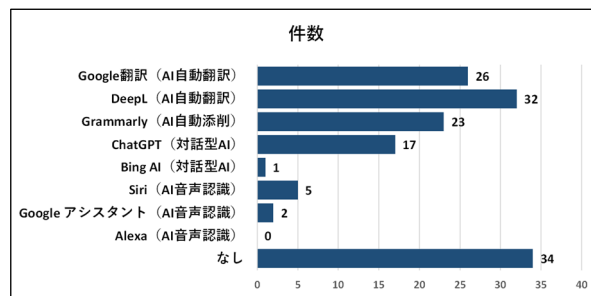


図2：授業で勧められたり許可されたりしたツール

これを見ると、比較的、読み書きに利用できるツールが挙げられているように思われる。一方、1~5件と非常に少ない数ではあるが、音声系のツールもあった。

項目5ではAIツールをどのように英語学習で活用したかを尋ねた（表1.1, 1.2）。表1.1のGoogle翻訳については、単語（21件）、リーディング（20件）、自分の発音の確認（7件）、正しい（辞書的な）発音の確認（5件）などが見られた。同じ翻訳ツールでも、DeepLはリーディング（8件）以上にライティング（10件）の際に使われることが挙げられ、単語（4件）については多少使用する者がいるものの、Google翻訳ほどの使用ではない。また、添削ツールであるGrammarlyは圧倒的にライティング（11件）や文法確認（6件）の目的で多く使われている。

表1.1：ツールをいかに活用したか（翻訳・添削）

| ツール／目的 | Reading | Writing | 単語 | 自分の発音確認 | 文法確認 | 正しい発音確認 | (計) |
|-----------|---------|---------|----|---------|------|---------|-----|
| Google翻訳 | 20 | 4 | 21 | 7 | 1 | 5 | 58 |
| DeepL | 8 | 10 | 4 | 0 | 2 | 1 | 25 |
| Grammarly | 0 | 11 | 0 | 0 | 6 | 0 | 17 |
| (計) | 28 | 25 | 25 | 7 | 9 | 6 | |

さらに表1.2にまとめたSiriやGoogleアシスタントといった音声ツールや、ChatGPTといった生成AIについての調査によると、音声ツールは自分の発音の確認（学習者の話す英語をAIに認識・評価させること）やスピーキング、リスニングに活用されていた。生成AIであるChatGPTについては、情報収集に利用しているとの回答が2件あり、その他のツールとは異なる利用目的が見えてくる。これらのことを踏まえると、学習者がツールの特徴をよく捉え、目的別に使い分けられている様子が浮かび上がる。同じ翻訳に関わるツールでも、プラットフォームの違いを利用して異なる目的で利用していることは特筆すべき点であろう。

表 1.2：ツールをいかに活用したか（音声・生成）

| ツール／目的 | 単語 | 自分の発音確認 | Speaking | Listening | 情報収集 | その他 | (計) |
|------------------|----|---------|----------|-----------|------|-----|-----|
| Siri | 1 | 4 | 2 | 0 | 0 | 0 | 7 |
| ChatGPT | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 1 | 3 |
| Google Assistant | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 |
| (計) | 1 | 4 | 2 | 1 | 2 | 1 | |

項目 6 では AI ツールを英語学習で使用したときの気持ちや感想について尋ねた（表 2.1, 2.2, 2.3）。学習者の回答は否定・肯定の軸を用いて 3 つの大きなカテゴリに分け、その後サブカテゴリに分類した。圧倒的に多かった「肯定的認識」（AI ツールの使用を肯定的に捉えたもの）のカテゴリにおいては、「利便性」（役に立つ・楽だ）について述べるものが多く、その中でも「有用性」（役に立ったなど）38 件、「簡便性」（楽だなど）19 件、「効率性」（時間短縮・効率化など）7 件に言及するサブカテゴリを形成していた（表 2.1）。その他にも、「主体的な学習」（AI を取り入れて主体的な学習に役立てること）に関する言及をする回答も 5 件あった。これらの結果から学習者は、AI ツールの利便性を肯定するものが大多数で、主体的学習に活かすことを検討している者も一定数いる様子がわかる。

表 2.1：ツールを使用した際の気持ち（肯定）

| 肯定的認識 | 利便性 | 有用性 | 38 | 役に立った／自分では思いつかないような英語の文章を知ることができたので、とても役に立った |
|-------|--------|-----|---|---|
| | | 簡便性 | 19 | 楽だと思った／一回生の頃より明らかに自動翻訳の精度が上がっており、楽だと思った |
| | | 効率性 | 7 | 時間短縮ができ、作業の効率化にも繋がると感じた／正確に訳せるので、勉強のサポートとしては効率的だと思う |
| | 主体的な学習 | 5 | 分からない英文は素直に翻訳することも学習のひとつだと感じた／Grammarly で冠詞の書き忘れが多いと分かって、気をつけようと思った | |
| | その他 | 3 | 自分が考えた英語や発音が通じていると安心した | |

また、肯定的な認識と否定的な認識が入り混じった「肯定的・否定的認識」カテゴリにおいては（表 2.2）、「利便性と信頼性への疑念」（役に立つことは認めつつも AI の産出する言語の正確さや適切さに疑いを持つもの）のサブカテゴリに分類される回答が 13 件あった。英語を専攻する学生として、AI の産出するものをすぐに受け入れず、批判的に検討する態度を持っている学

生が一定数いる可能性がある。実際に、AI ツールの精度は上がっているものの、人間の目による見直しは未だ必要とされている。また、chatbot によっては、真実でないことを生成することもあるので、こういった注意は必要であろう。

表 2.2：ツールを使用した際の気持ち（肯定・否定）

| 肯定的・否定的認識 | 利便性と信頼性への疑念 | 13 | 便利であるとしても役に立ったが、AI ツールが必ずしも正しくはないと考えているので見直しをするようにしている |
|-----------|----------------|----|--|
| | 利便性と罪悪感 | 9 | 大変楽だが、少し悪いことをしているような気になった／役に立っているが、参考している分後ろめたさもあった |
| | 利便性と主体的学習意欲の喪失 | 5 | 楽なのであまり考えなくなってしまう |
| | 利便性とその他 | 3 | 役に立ったが、自分の英語力が伸びるか不安に感じた |

また、「利便性と罪悪感」（利便性を認めつつも後ろめたさを挙げるもの）のサブカテゴリ（9 件）では、「大変楽だが、少し悪いことをしているような気になった」という声などが上がった。機械翻訳や生成 AI については、授業や課題においてどの程度の利用が容認され、どこからが不正行為とみなされるかなどの線引きが未だに不確定である。実際に、英語グローバル学科の 2023 年度シラバスには一部、機械翻訳の利用を禁じる旨が掲載されており、他の教育機関や教育委員会などにおいて全面禁止としている例もある。こうした背景から、利便性を感じつつも利用することに後ろめたさを感じる学習者もいるのではないかと考えられる。「利便性と主体的学習意欲の喪失」（便利だと感じつつも、AI に頼るなどして自分で考えることがなくなるなど）を挙げた回答も 5 件あり、「楽なのであまり考えなくなってしまう」との回答などがあつた。AI に奪われる仕事や AI の登場で過去のものとなるスキルなどがメディアでセンセーショナルに取り上げられることもあるが、AI が翻訳し文章作成をする中で、実際に言語学習することの意義を見出せなくなる学習者が英語を専攻する学生の中にも出てきているのかもしれない。

最後に、少数ではあるものの、「否定的認識」のみを持つ回答も 3 件あった（表 2.3）。AI ツールの「信頼性への疑念」（AI ツールが産出する結果の正確さや適切さなどを信頼できないとする回答）の他、英語が身につかないと感じるなどの回答であった。表 2.2 と 2.3 の両方で上がった、「信頼性への疑念」については、課題を遂行するプロセスにおいて、AI に対して批判的な視点を持って検討するという姿勢が表れている。先行研究の Lee (2021) においても機械翻訳の使用が学習者間の対話やメタ言語意識を高める要因となったとの報告

がある。このように、AI を成果物を生成するためではなく、その過程を支援するために用いるという過去の研究者らによって提案されている姿勢を少数(13件、2件)ながら学生の中にもすでに持っている者がいることがわかった。

表 2.3：ツールを使用した際の気持ち（否定）

| | | | |
|-------|---------|---|---|
| 否定的認識 | 信頼性への疑念 | 2 | AIアプリのすべてが正しいわけではないため、自分で何度も確認する必要があると感じました |
| | その他 | 1 | 英語が身につかないと感じた |

項目 7 では AI ツールを英語学習のために役立てるためにどうすれば良いかの提案を募った(表 3.1, 3.2)。回答は 5 つの大カテゴリに分け、その後サブカテゴリに分類した。「限定的使用」(全体ではなく、わからない箇所に限ること、文章全体ではなく単語に限って調べることなど)を提案した回答カテゴリでは、「わからないとき」(わからない箇所のみ使用することの提案)(15件)や「部分的」な使用(補助的な使用など)に限定すること(6件)、「単語」のみ(文章全体を訳すのではなく、単語単位の翻訳で使用することの提案)(5件)とする回答が見られた。課題や文章全体に AI を使って取り組み完成させるのではなく、課題に取り組む際の補助的な役割を AI に求めることを提案する姿勢が見て取れる。

表 3.1：英語学習に役立てるための提案

| | | | |
|-------|---------------|----|--|
| 限定的使用 | わからないとき | 15 | 毎回使うのではなく、考えても分からない時に参考する程度で使いたいと思う |
| | 部分的 | 6 | AIツールに全て委ねるのではなく、あくまで自分の英語力を上げる補助的なツールであるという認識を持ち活用する |
| | 単語 | 5 | 文章ごとではなく単語単位で訳す |
| | その他 | 7 | メモリルをつけて使用すること |
| 確認 | 評価フィードバック確認機能 | 22 | 自分で書いた英語や話した英語を訂正や改善のために使う |
| | 批判的検討 | 6 | AIが出した答えを信じずに一度自分で確認する |
| | 他者との話し合い | 2 | AIツールを使用して英語学習をした際に効果的だったこと(例えば、自分の発音を確認できた等)を友達同士で共有して、英語能力向上に繋がると感じたら実践してみよう |

「限定的使用」とともに頻繁な回答があったのが「確認」(自身の産出する英語をチェックする)目的での使用を提案する回答であり、「評価やフィードバック、確認機能」(誤った箇所を示したり、訂正案を提示したりといった機能)として AI を使用することを提案した回答が 22 件、AI の回答を自身が「批判的検討」(AI の産出したものを信じずに一度自分で反芻・検討するとしたもの)しながら使用することを提案する回答が 6 件、「他者との話し合い」(AI が産出した言語をクラスメイトなどと協働して批判的に検討すること)を経て確認するという回答が 2 件あった。通常教師やクラスメイトなどの他者が行っている評価やフィードバック、チェックの機能を AI に任せるといった信頼がある一

方で、AI の回答を自己や他者との対話を通して批判的に検討するという回答があるのは対立的で興味深い。また、この「確認」カテゴリに分類された 30 件の回答には先行研究で指摘されているような批判的な検討、対話、メタ言語知識の活性化とも関わるような学習プロセスが描写されている(「自分で確認する」、「友達同士で共有して…実践してみる」など)。

また、AI 使用に関して何らかの「否定」を伴う回答(頼るのではなく、鵜呑みにするのではなく、楽するのではなくといった否定的条件を含む回答)をサブカテゴリに分類したところ(表 3.2)、AI に「依存」することを否定する(頼りすぎることの否定)回答が 21 件あり、そのうち、「自身の認知の介入」(自分の頭で考えるなど)をさせることが大事だとする回答も 11 件あった。これについても、AI を課題遂行の主体ではなく学習過程における補助として位置づけようとする先行研究のスタンスと重なる。その他、「時短・楽」(時短や楽をするためだけに使用すること)を否定する回答も 4 件あった。依存することを嫌う背景には、実際にこうした AI ツールを日常的に多くの学生が使っている(図 1 など)ことがあるのかもしれない。自分の代わりに翻訳し、文章を生成できるツールがあることで、依存しすぎないように律するコメントが特徴的であった。

表 3.2：英語学習に役立てるための提案

| | | | | |
|--------|------|---------------------|--------------------------|---|
| 否定 | 依存 | 自身の認知の介入 全面依存の否定 | 11 | AIツールに頼りきりになるのではなく自分で考えることが良いと思う |
| | 時短・楽 | | 10 | 全て鵜呑みにするのではなく、参考程度にする |
| | その他 | | 4 | 楽をするために使うよりも実践的に使えるタイミングで活用していく |
| | | | 3 | その場しのぎとして利用するのみとして、自分の力にならないので時間がある時や普段の勉強の際は辞書を使う方がいいと思う |
| 正しい使い方 | | 14 | 正しい使い方を理解して使用すること | |
| 主体的学習 | | 10 | 自分の補いたい英語学習の分野に適したツールを使う | |
| その他 | | 6 | 使い方に気をつける | |
| 未回答 | | | 5 | |

提案の中にはまた、「正しい使い方」(学習に AI を活用する方法に正解や不正解があり、その正しい使い方をすべきとの立場)に言及する回答も 14 件あった。教育現場での AI 使用については意見も割れており、AI の急激な発展の後に続くしかない教育研究や検証の結果が出揃っているとは言い難い。言語学習時に長期に渡ってこうしたツールがあることを経験した世代が未だないため、確固たるエビデンスに基づく「正しい使い方」の定義は存在しないが、「正しく」使うことを強調する声や、教師による「正しい使い方」の指導を希望する声は、不正行為と疑われないための規範内での使用方法の他、本質的な学習をするための正しい使用方法を学生が求めていることの表れと考えられる。

最後に、AI 利用の提案として、「主体的学習」（課題などではなく、自主的な学びのために AI を使用すること）を意識した回答も 10 件あった。「自分の補いたい英語学習の分野に適したツールを使う」という、自身の学習や分野、目的を意識した使用を提案する回答などがあった。

6 おわりに

本学科英語文化専攻では、AI の急激な進歩を受け、自己、他者、AI との批判的な視点による対話を通して、英語リテラシーを育成するプログラムを実施することとした。それに先立ち、本研究では、学生が実際に AI ツールを使用する状況を把握するための調査を実施した。

調査では、すでに非常に多くの学生たちが AI に触れ、利用していることや、教員からの推奨を受けて使用している様子が見てとれた。特に、音声系の AI より読み書きに関する AI の利用が多数見られた。また、さまざまなツールの特徴を活かし、ツールごとに異なる目的（自身の発音の確認、読む際に利用する、書く際に利用するなど）で使いこなしている様子も浮かび上がってきた。本調査時点では、Google 翻訳のような AI 翻訳ツールの使用者が多く、ChatGPT のような生成 AI の使用者はごくわずかであったが、今後はより普及すると考えられるため、使用方法の指導が必要である。

ツールを利用したときの気持ちにおいては、肯定的な気持ちを報告する学生らの数が多かったが、肯定・否定の相反する気持ち、一握りの否定的な気持ちを感じている学習者の様子が見てとれた。AI ツールを利用した英語学習に対する積極的・肯定的な気持ちを養えるよう、授業内で実際に活用させ、AI ツールがどのように英語学習に役立つかを他の学生と話し合ったり、考えたりさせたい。

英語学習に役立てるための提案では、（文章や課題の）全体ではなく、限定的範囲や要素（単語など）に絞って AI ツールを使用することや、わからない箇所のみを使用することなどを挙げる者が多かった。また、自身の執筆物や発音の確認のために AI 利用を提案する学生も複数おり、通常教師やクラスメイトが担っていたフィードバックの役割を AI に託すというアイデアが挙げられた。また、同様の「確認」という用語を使っているものの、AI が産出したものを批判的に検討するという意味で「確認」が必要だとした学生もいた。その他、AI に依存することや、「時短」や「楽」をするために使用するのではなく、より自分自身の認知を介在させることなどを提案する回答もあった。自分の学びたいことに適したツールを選ぶことなど、「主体的学習」に AI

を活かすことや、学習のために役立つ「正しい使い方」をする必要性なども挙がっていた。

調査を通して、学生らの AI 使用を批判的に検討する態度など、AI との共存についてすでに理解し、実践している学生が多いのではないかと印象を受けた。先行研究や本研究の研究者らが検討している深いレベルでの認知処理をどれだけの学習者が普段から行っているかは今回のアンケート調査のみでは明らかにすることはできないが、本稿 2 ページで述べた本専攻にて実施する英語リテラシープログラムのひとつの段階である「AI の回答を批判的に検討する」という点についても、すでにそのような態度で AI に接しているような回答もあった。

今後の展望としては、今回のアンケートでも触れたようなトピックについて、異なる習熟度の学習者が AI をどのように使うか、また、技能やタスクごとに AI をどのように使うかなどを観察・記述する他、AI 活用時に学習者自身がどのようなことを感じ、考えながら判断をしているのか、そこに他者（クラスメイトなど）が加わり、対話や協働が起こる際にどのような気づきや学びがあるかについても明らかにしていきたい。最終的には、AI 時代の英語教育・学習に適した教材作成、教育方法の検討、学習成果の評価方法についても検討し、高校卒業時から英語による卒業論文執筆までの大学 4 年間のカリキュラムにおいて、本専攻では、AI が存在する世界に羽ばたく学習者を支援するプログラムをデザインしたいと考えている。

付記

本稿は 2023 年 8 月に開催された全国英語教育学会第 48 回香川研究大会（於：香川大学教育学部）での口頭発表の内容に加筆・修正を加えたものである。

引用文献

- (1) ChatGPT Is Making Universities Rethink Plagiarism. Wired, 2023.
<https://www.wired.com/story/chatgpt-college-university-plagiarism/>
(2023年1月20日にアクセス)
- (2) Will ChatGPT take my job? Here are 20 professions that could be replaced by AI. The Economic Times, 2023.
<https://economictimes.indiatimes.com/news/how-to/could-ai-take-your-job-chatgpt-says-it-can-replace-humans-in-these-20-professions/articleshow/98756808.cms?from=mdr>
(2023年3月19日にアクセス)

- (3) 文部科学省. 大学・高専における生成 AI の教学面の取扱いについて (周知). 2023.
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/2023/mext_01260.html
(2023 年 7 月 13 日にアクセス)
- (4) Tsai, S. C. Chinese students' perceptions of using Google Translate as a translingual CALL tool in EFL writing. *Computer Assisted Language Learning*, 35(5-6), 1250-1272, 2022.
- (5) Lee, Y. J. Still taboo? Using machine translation for low-level EFL writers. *ELT Journal*, 75(4), 432-441. 2021.
<https://doi.org/10.1093/elt/ccab018>
- (6) 有斐閣. リテラシー. 有斐閣 現代心理学辞典. 2021.
https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=5350046420_36740 (2023年10月9日にアクセス)
- (7) 有斐閣. 批判的思考. 有斐閣 現代心理学辞典. 2021.
https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=5350038710_12080
(2023 年 10 月 3 日にアクセス)
- (8) 有馬明恵. 内容分析の方法. ナカニシヤ出版, 京都. 2007.
- (9) Lee, Y. J. Ibid.